OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嗚呼、宮地裕先生
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	語文. 2022, 118, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語文118（2022・6　大阪大学国語国文学会）

嗚呼、宮地裕先生

森山卓郎

先生は九十七歳で天国に旅立たれた。コロナ禍の中、お見送りも叶わなかった。いまだに信じられぬ思いである。せめてもの追悼の思いを書かせて頂けることに心より感謝する。親しく教えて頂いた一学生として、ここでは、阪大での先生との思い出を中心に記させて頂く。なお、明治書院『日本語学』二〇二二年夏号の追悼号にも、「宮地裕先生の学問とお人柄」として、小文を寄せる機会を頂いている[1]。

先生は、暖かい教育者であった。先生のご指導は授業や研究室のほか、「檜」「富五郎」など様々な場でのこともあった。結論を急ぎすぎることをたしなめて下さった時もあった。おもしろいね、と励まして下さることもあった。書いたものにはいつも赤ペンで指導をして下さった。今考えれば相当お忙しかったはずなのだが、論文やレポートなどを一つ一つ丁寧に読んで下さっていた。研究をしていくには思考法も含めた「書き方」に習熟していく必要がある。その手ほどきをしてくださったのだった。

論文というものの「校正」の仕方も先生から教わった。「・」「、」では関係が違うということ、括弧と句読点の順序には注意すべきことなどは、当該箇所を見るたび、今も思い出す。

梅田でのコンパの帰り道、先生に「社会に役立つ研究のあり方」について伺ったことがあった。その時、先生は、社会に役立つという観点は本当に大切だとおっしゃった。まさにご自身もそういった研究も進めていらっしゃる先生の言葉は重かった。そして、例えば飛行機のプロペラの研究をしていたとしても、ジェットエンジンができたら必要なくなるということがある、その時の目先のことを考えても所詮限界がある。もっと大きな見方も大切だ、ということも教えて下さった。私にとって研究のあり方を考える上での指針であり続けている。

先生はいろいろなお仕事でお忙しかった。ご自身のご研究と学内のお仕事はもちろんだが、それ以外にも、国語教科書編集のお仕事、日本語教育関係や文部省関係の委員のお仕事というように、

色々飛び回っていらっしゃった。早朝に飛行機で東京から大阪に戻られたという日も多かった。たまに機内サービスのキャンディを頂いた。

御巣鷹山日航機墜落事故の日、先生が東京から帰られる日だった。テレビの速報に、少し似た名前の方があった。気が気ではなかった。そのお名前はやはり別人だったのだが、後で伺うと、ちょうどその便に乗られるところだったとのこと。たまたま飲んでいらっしゃって便を変えられたのだった。飲み過ぎは時に命を救う。心配しました、と言うと、先生は、「人間、死ぬ時は死ぬんだから、しょうがないよ」とおっしゃった。予備士官学校ご出身でもあり、軍隊経験がおありの先生ならではのお言葉だと思った。

ある日先生は演習の時間に比較的長い時間目を閉じていらっしゃるように見えたことがあった。不肖の弟子は、いくら先生でもあのお忙しさゆえ疲れていらっしゃる時はあるのだと思った。しかし、学生の発表の後、先生のご指導はまさに詳細かつ的確で示唆に富むものであった。先生の辞書には「疲れ」などないのだと深く反省した。

宮地裕先生と敦子先生の両先生を中核にした研究会である「国語学研究会」があった。両先生の教え子のみなさんが集っていらっしゃった。ふつうならなかなかお目にかかれない、大先輩や同輩の研究者からいろいろなことを教えて頂く貴重な機会でもあった。今となっては鬼籍に入られた先輩方もいらっしゃるのだが、あの楽しい研究会の雰囲気は忘れられない。敦子先生ご逝去の後は、研究会の前にみんなで敦子先生のお墓参りをしていた。それもつい昨日のようである。

先生の研究室は国際色が豊かであった。たくさんの留学生がいらっしゃった。初めて先生の研究室を伺った時、先生が研究室で瀬戸黒のお茶碗に淹れて下さったのはウーロン茶だった。当時まだそれほど一般化していなかったウーロン茶のそのやさしい味は、私にとってほとんど初めて意識する生の「外国」だった。

先生は光村図書と中国の人民教育出版社との合作による『中日交流標準日本語』を企画・編集された。自学自習ができる黄色いその本は海賊版が多数出てこまるほど、中国で一番よく出ている日本語の教科書であった。今は第二版となっているが、依然大きなシェアを誇る。二〇一八年には出版三〇周年記念式典が北京で開かれ、多様な学習者が参加して日本語を学ぶ喜びを語っていた。先生が築かれた日中友好の「言葉の橋」は今も生きている。

たまたま韓国で先生とお会いできたこともあった。中国で、タイで、同門の方のお世話になったこともあった。先生は近くも遠くも見ておられた。

先生は姿勢良くいつも凛としておられた。先生のスケジュールを見せて下さった時、「プール」という文字があちこちにあった。楽しい先生だった。助手室の電話が鳴った時、助手仲間からの電話と勘違いして、「むおーし、むおーし」と出たことがあった。しかし、電話の主は宮地先生。あっ！と思った。意外なことに、先生も合わせて「むおーし、むおーし」とふざけておっしゃった。し

ばらく笑ってしまって話にならなかった。

先生が留学生のパーティーで新内節を披露してくださったこともあった。手ぬぐいを頭に、三味線を弾いて謡われた。ずっと晩年まで岡本文弥師のことを「先生」と深い敬意を持って呼んでいらっしゃった。先生は寮歌など歌の作詞もなさっていた。水泳も新内も詩作も、人生には幅というものが必要だということを学ばせていただいた。ただ、私の場合、その幅の部分ばかりがやけに大きくなってしまっている。

先生の歌詞の一つに、「終わりの時まで、ひとつおぼえのように、言葉の美と真実を求め続けていきたい」（「願い」）という一節がある。なにより、先生は常に一歩先を考えていらっしゃる研究者であった。『話し言葉の文型』を中心とした語用論的アプローチを含む表現の文法、その音声文法的アプローチ、五分類のもととなった敬語論研究、日本語の特性に鑑みた構造主義的な形態論研究、連語論と語彙的意味の研究のさきがけとしての慣用句・連語論研究、日本語教育論・国語教育論などの社会実践をめざした研究というように、いろいろな領域に亘って先生は研究を先導された。改めて自分が関心をもって考えていることを反省してみると、それはほぼ先生のご研究の軌跡の中だと言える。まさにお釈迦様の掌の中である。今も時々、先生にもっと伺っておくべきだったと思うことがある。

先生が宝塚逆瀬川に移られてからのことであるが、ある夜、夕食をごちそうになったあと、先生のお部屋でビールを頂いた時があった。誤って先生はビールを冷凍庫に入れていらっしゃった。なかなか溶けませんね、といいながら二人で溶かしながら頂いた。しかし、その溶け始めの時のビールはかなり濃い感じで、本当においしかった。その時、研究はしっかりまとめていった方がいいよ、本を出していくんだよ、と先生がおっしゃった。「はい」と答えた。しかし、それから、もう数年が経ってしまっている。不肖の弟子はぼんやりうかうかと日々を過ごしてしまい、もはや先生に研究の報告を献呈させていただくような機会は永遠になくなってしまった。嗚呼、先生の温顔を思い出す。あれだけ暖かいご指導を親しく受けたのに、まだその学恩に報いるようなことができていない。つくづく、自分が情けない。

しかし、目を閉じると、今も心の中で、先生はほほえんでいらっしゃる。静かに励まして下さっている。

（もりやま・たくろう　早稲田大学教授）

注

（1）先に出た「宮地裕先生の学問とお人柄」『日本語学』二〇二二年夏号（41-2）に、「母方のご祖父が板垣退助伯」と書いたが、正しくは父方の曾祖父であった。明治一五年の「板垣死すとも自由は死せず」の岐阜事件の時に、負傷した板垣伯をおんぶして走られたというお身内のお話を伺ったことがあった。それがお父上というのは私の勘違いで、ご祖父である。ここにお詫びとともに訂正する。